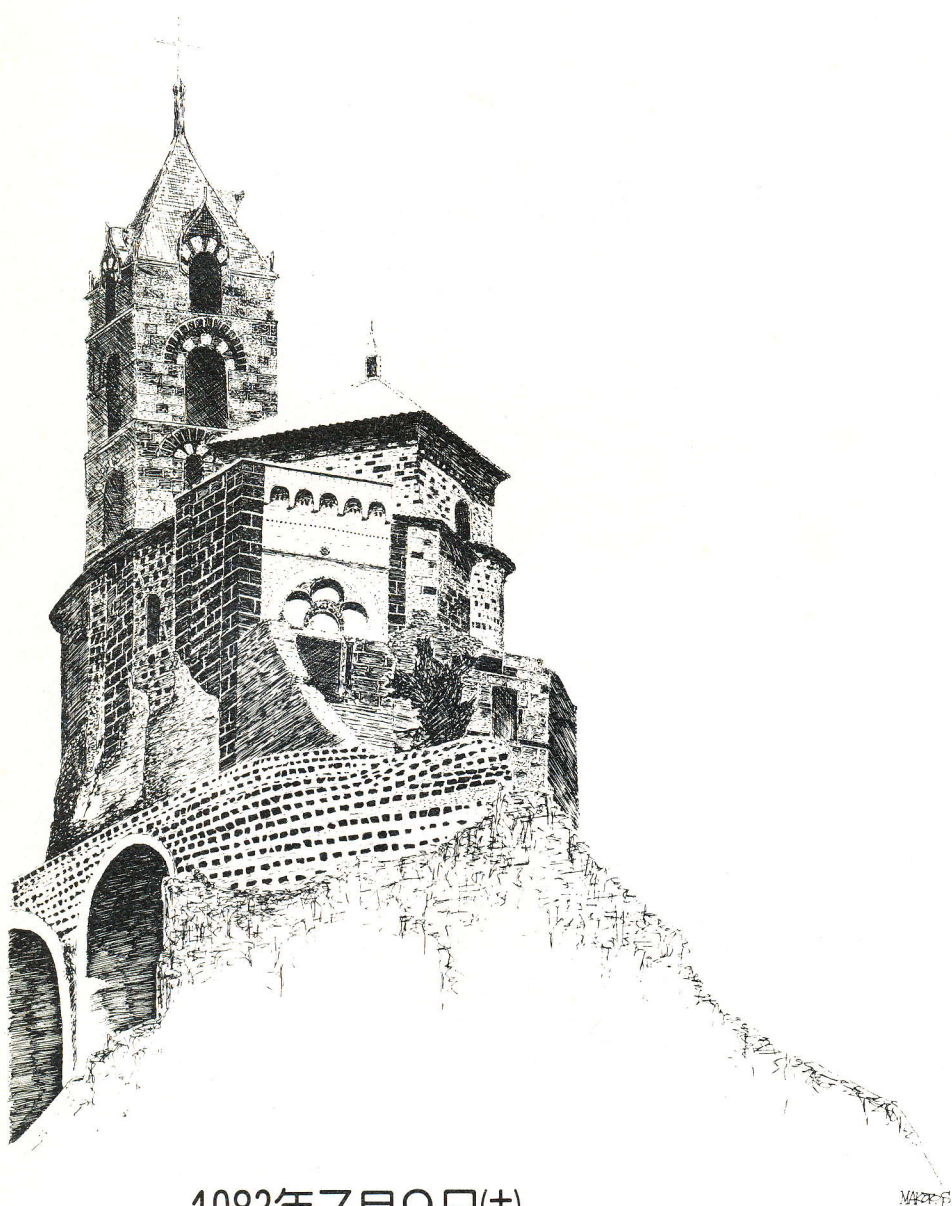


# SUMMER CONCERT



1983年7月9日(土)  
6:30<sup>PM</sup>開演  
神戸文化ホール(大)

神戸大学交響楽団

プログラム

歌劇「ザンパ」序曲……………エロールド

指揮 逢坂賢司

バイオリン協奏曲 二長調……………チャイコフスキー

指揮 田中一嘉

独奏 景山誠治

————— 休 憩 —————

交響曲 第5番 ハ短調「運命」……………ベートーヴェン

指揮 田中一嘉

御 挨拶

神戸大学経済学部教授 新保 博

暑い夏の訪れとともに、恒例の神戸大学交響楽団サマー・コンサートのシーズンを迎えることになりました。4月から新しいメンバーを加え、交響楽団全員が新たな気持で日夜練習にはげんでまいりましたが、その成果を皆様に聴いていただけることは、われわれにとって無上の喜びです。

今回のプログラムは、ベートーヴェンやチャイコフスキーの名曲をとり上げておりますが、新進気鋭の指揮者と独奏者を迎えることができました。青春のもつ喜び、華やかさ、甘さ、力強さ、を十分に味わっていただけるものと確信しています。ミューズの神とともに歩むわれわれに、今後とも暖かい御声援をお願いいたします。

では、ごゆっくりと美しい音楽をお楽しみ下さい。

響友会々長 岩崎 純一

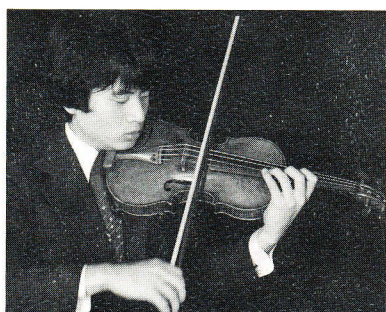
酷暑の候を迎えましたが、本日は恒例により神戸大学交響楽団によるサマーコンサートを開催いたしました処、皆様には多数ご来場下さりまして誠に有難うございます。何日も変らぬご支援を賜り厚く御礼申し上げます。今回は景山誠治氏によるチャイコフスキーのヴァイオリン、コンチェルトとベートーヴェンのシンフォニー『運命』を演奏することになりましたので団員一同は充分練習を積み重ねて参りました。その情熱と努力の結晶を充分発揮されんことを祈念いたす次第であります。どうか最後までごゆっくり、ご静聴をお願い申しあげて歓迎の辞といたします。

## 指揮者 田中 一 嘉

1953年東京に生れる。1972年桐朋学園音楽学部入学。指揮を故斉藤秀雄、小澤征爾、秋山和慶、尾高忠明の各氏に師事。同時にコントラバスを江口朝彦氏、堤俊作氏に師事する。在学中に桐朋学園オーケストラに指揮者、コントラバス奏者として参加、定期演奏会等を指揮する。また長門美保歌劇団、日本オペラ協会の副指揮者、合唱指揮者として研鑽を積む。1976年第4回民音指揮者コンクール入選、奨励賞受賞。1978年卒業。卒業後、新日本フィル、東京交響楽団、京都市交響楽団、群馬交響楽団、東京シティフィル、佼成ウインドオーケストラ、東京放送合唱団等を指揮し現在に至る。



「写真・木之下 晃」



## ヴァイオリン 景山 誠 治

1959年、大阪に生まれ、5歳よりヴァイオリンを始める。1967年、相愛学園子供音楽教室に入室、第25回学生音楽コンクール小学校の部全国1位、第26回同コンクール中学校の部全国1位、第46回音楽コンクールヴァイオリン部門3位入賞。1978年、東京芸術大学音楽部に入学1980年霧島国際音楽祭に東京ブラームスクールテットの第1ヴァイオリンとして霧島国際賞を受賞、民音室内楽コンクール2位。同時に斉藤秀雄賞を受賞。1981年、安宅賞を受賞、第8回ヴィニアフスキー国際コンクール4位入賞。吉永清子、海野義雄、ゲルハルト・ボッセ、浦川宜也の各氏に師事。

## 管トレーナー 有馬 博 隆

大阪音楽大学卒業。Oboeを鈴木清三、延原武春、両氏に師事、在学中より室内楽等に出演。そして卒業演奏会、関西新人演奏会等数々の演奏会に出演し、又、'77年にはソロリサイタルも行なった。

現在、甲陽学院講師を務めるかたわら、放送演奏会活動も行なっている。

当オケとのつきあいは3年目であるが、OBかと思わせる若さと、プロとは思えぬほどの気さくさゆえ、オケ内での人気も、上昇中の氏である。



## 学生指揮 逢坂 賢 司

一管楽器奏者として筆者は彼を恐れている。それは彼の課す練習の厳格さの故ではない。筆者の最も恐れる所は彼の讃岐弁と「体操の時間」スタイルである。これは彼の厳格さを奇妙に増幅し、筆者にとっては最大の脅威である。彼が讃岐弁で我々に注意を与える時、大多数はただじっと譜面を見つめ、彼自身が翻訳してくれるのを微動だにせず待っており、彼と同郷の約2名のみが、その意味を解し、不気味に顔を見合わせるのである。このほんの一瞬、学館ホール全体が緊張し時間が止まるのであるが、この瞬間こそ筆者を恐れさせるのである。更にもしその時、彼が胸に燦然と某中学の校章の輝く体操服と紺のトランパンを見事に着こなし、雄々しく指揮台に立っている様な事になると、筆者は例え楽器を吹いている最中でも、余りの恐怖の為に震えが止まらず、へそで茶を沸かしそうになるのである。

## コンサート・マスター 大西 正 人

最近、教育実習を終えてきた氏の nickname は、「シロー先生」（サブロー、シローの太った方のこと）だったそうです。以下、その時の教え子の感想です。「最初見て、スケベそうな人やなと思いました。」「しょうもないギャグが受けなかった時の、フォローが甘い。」「先生の大きな目が、こぼれそうで、気になって、授業どころでは、ありません」。実際、彼の目の大きさは、ほとんど病気で、寝る時も目が閉じなくて、朝起きると、目に埃がたまっているらしい。このこぼれそうな目で睨まれると、思わず噴き出してしまうので、Soloの直前などでは彼の目を見ないようにしている奏者は、私だけではないはずである。

ご来場の皆様も、「コンマスの目がこぼれそうで、演奏を聞いているどころではなかった」などということのないように、あまり、注目しないことをお勧めします。